

## プレ・コンファレンスの感想

世話人：艸場よしみ

私は科学と社会について、関心というか、問題意識を持っている。問題意識とは、本の編集や執筆を生業としているので、科学（者）と一般の人のかけ橋としてどうしたら役に立つ仕事ができるかを考えているためだ。本稿の「感想」は、これが背景にある。

しかし科学のトレーニングを受けてこなかったもので、理解が追い付かない。またこの感想は科学的論考ではなく、断片的なものに終わっている。批判を賜りたい。

なお文中で「私たち」と言っているのは、「私のような、科学者でない一般市民」という意味である。

\*\*\*

2012年夏の一連の会（基研主導研究会とプレコン）を前に、ある新聞社の編集委員に、純粋な研究活動に焦点を絞った[基研主導研究会（原子力・生物学と物理）](#)を紹介したら、次のように言われた。

「これまで学問の世界をいろいろ取材してきたが、学者が『純学問的』と言うときは、要注意だった。『純学問的』という空間は、学者にとっての安心出来る場であり、自分たちの権威をたもてる、逃げ込みやすい場所なのではないか」

私は基研主導研究会の世話人でもあったので正直悔しかったが、企画者である坂東昌子さんにこの話を伝えると、深くうなずいて「そういう面はあるだろう」と言われた。私は、坂東さんが批判を歓迎する態度を保ち続けられる科学者であることを改めて感じた。

坂東さんを軸として[NPO法人あいんしゅたいん](#)が、この8月の一連の会を企画した意図は「今回のような世論が対立するテーマで、立場の違う人を建設的な議論に引きこみ、批判を歓迎し、よりよいものを目指す」ことだと理解している。基研主導研究会ではできなかった、科学と社会のかかわりについて議論するプレコンで、この意図が少しでも達成されることを願った。

そして当日。定員いっぱいの40名が参加した。翌日から行われる基研主導研究会の参加者が主で、北は青森県から南は佐賀県まで、物理、工学、生物、医学など様々な分野の専門家がやってきた。加えて福島からの避難者、市民、そしてメディアの人もいた。被災者の声をじかに聞きたい、社会と科学について考えたいという気持ちが感じられた。じっさい、一定の報告が終わったあとは、当初の予定を変更して自由討論になだれ込んだ。

\*\*\*

強制的に避難させられた人と自主避難してきた人とでは、意識に差がある。自主避難者は、放射線の影響について不安を感じ、自分で情報を集め、自分なりの理解をして、避難した人である。放射能への不安は、より強いようだ。

自主避難者の人が福島に帰らないのは、不自由な生活が待っているからだと言う。なるほど、と思う。わが子には放射線を少しでも避けてほしいという思いから、子どもの活動

を制限しないとイケない現実がある。言って聞かせて分かる年齢ならまだしも、幼い子どもは行動はコントロールが利かない。制限がある場所での子育てが大きなストレスになることは、よく理解できる。

津波も原発事故も、住民は一方的な被害者だ。たまたまそこに生まれ暮らしていた人が被った。まずは、その人がストレスとを感じるものから逃げる。これが社会的にも支援されてしかるべきではないかと思う。

\*\*\*

ただ、放射線について流れている情報が、正しい情報かという問題がある。

厳密に放射能を避ける生活を希望している人が判断の頼りにした情報源は、ほとんど共通していると聞いた。これらの情報源は、どこまで正しい内容だったのか。

これについて、ある発言が的を射ていると思った。

「今問題なのは、『誰かが言っている』という情報を、そのまま次の人に与えていることである」

とは言え、これまで放射線について知識のなかった「普通の人」は、誰かが言っている情報が正しいかどうかを自分で確かめろと言われても、簡単なことではない。それに、普通の人が信用のおける専門家にじかに聞けるチャンスは、めったにない。

私も「科学者」という人たちが近くにいなかった以前であれば、科学的に正しい情報とそうでない情報を分ける判断力は持ち合わせていなかったと思う。また、科学の人なら当たり前であろうことが、よく分からなかった。

たとえば原発事故直後、たばこの害と放射線の害を比べる解説を聞いたとき「そんな比べ方はひどい」と思った。しかし後でたばこと放射線の発がんメカニズムを学び、それが同じだと知った今は、この説明が納得できるようになった。このように、少しずついろんなことを知って行くにつれて、根拠で語ることの大事さを知ったし、あやふやではなくきちんと知ること、そして納得いくようきちんと伝えることが大事だとつくづく思う。

放射線影響について、私にはまだ分からないことが多い。ただ、出会う科学者の誰もが、現在の放射線量で影響が出ることは考えにくいと言った。また何人かは、データを見せながら丁寧に説明してくれた。そして、危険だという主張のもとになっている論文の非科学性を挙げる。(ちなみに、プレコンでバンダジェフスキー氏の名前が出た。翻訳書も出版されている。被災者をこれ以上混乱させないためにも、この分野の専門家がきちんと論評していただきたい)

いくらなんでも、みんなが間違っていたりウソをついたりしているとは思えない。確かに歴史を振り返ると、みんなが正しいと思っていたことがひっくり返ったこともある。しかし今回の放射線をめぐって交わされる科学者の議論を眺めていると、私は半分も理解できたわけではないが、根拠に基づいた議論らしいことは感じた。だから私は、もう少しちゃんと知りたい、根拠を持って理解したいと思うわけである。

たまたま科学者と知り合うことができた私は幸運である。でもいま専門家は、市民にじ

かに話をしようと行動し始めている。市民はおおいに活用すればよいと思う。

\*\*\*

科学者は「根拠」を大事にする。科学者はデータに基づいてものを見るトレーニングを受けているだろうが、普通の人是不慣れである。どのようにしたら、それを身につけられるのだろう。

チェルノブイリなどの例を挙げて放射線の人体影響を報じるあるテレビ番組に、まわりの科学者はみな眉をひそめた。因果関係の立証が不十分で、現象として起こっているさまざまな病気の根拠を、十分な考察を省いて放射線被ばくの影響と断定しているところが問題だ、と言う。

テレビは動く映像がないと番組を作れない。紙媒体は、専門書は別として、普通の人を読む本や雑誌はストーリーがないと読んでもらえない。これらのメディアは、読むのも面倒なデータを細かく粛々と説明するだけでは、視聴率が取れないし買ってもらえないのである。しかし、世間に知識を正しく紹介する媒介者として、メディアは非常に重要な役割を担っている。メディアはどうすべきなのか？

また、データは実態を集めたものはず（＝実態を表しているはず）なのに、私たちは、データと自分が見聞きしたことにギャップを感じてしまう。避難者の人が同じようなことを訴えていた。経験として聞く情報が、発表されるデータに反映されているのか？という疑問である。言ってみれば、病気になった隣人の家に、いったい誰かがデータを取りに来たのか？ということだ。

こうした感覚に加えて、いま福島県を中心に行われている甲状腺やホールボディカウンターの結果が、詳しい説明がないままNDで戻ってきていることに人々が不安を抱いているから、将来データがまとめられ発表されたとき、メディアや世間はどこまで納得するだろう。

日常生活で、私たちはデータを活用することに慣れていない。私も以前、「データよりも目の前の現実を見てほしい」と本に書いたことがある。

そんな私がデータや根拠が大事だと思うようになったのは、やはりこの1、2年で、データを精査しながら議論する科学者の姿をよく目にしたからだと思う。

私も含めてメディアに携わる人が、データについてもっと理解しないといけないと思う。現象の報道に走ってしまうのは、それが「受ける」と思うだけでなく、報道者自身が根拠となるデータを理解していない（馴染んでこなかったもので、理解しようという気にならない）からではないだろうか。

確かに世に出ているデータの中にも、いい加減なものもある。理解すれば的を射た批判ができるし、現象をデータ（＝根拠）と合わせて分かりやすく伝える知恵も浮かぶのではないだろうか。

\*\*\*

何をリスクと感じるかは、自分がコントロールできることかどうか大きい。

放射線の影響が怖くて、線量計を買って毎日測っている友人が東京にいる。彼女は以前から、子どもの食べ物や環境に細かく気を配っていた。彼女は事故後の生活に不自由を強いられているが、客観的に見れば「それ（事故以前の暮らし振り）も不自由」（物理学者の指摘）だったはずだ。しかし、自分が選んだことは不自由には感じない。

ここで気になるのは、そうした意識が強いことで生じる、あるいはすべてを知っているわけではないのに知っていることをすべてだと思ふことで生じる（米やヒジキを例に挙げた発言があった）、ある種のちぐはぐさである。

今回の事故で、誰もがまず個人として達成したいことは、自身や家族が健康でいられることだ。誰にでも、自分で選びたい、コントロールしたいという気持ちはあるが、それがあまりに強くて、本来達成したかった目的が変質し、周囲の理解が得にくくなるのが気がかりである。

しかし、こんなふうに母親たちを混乱させているのは何なのか。

福島原発の事故がもたらしたものは、「分断」だと言われる。物理的な分断に加えて精神的な分断だ。避難でコミュニティが崩壊しただけでなく、避難区域の線引きで補償額に差ができて生じる分断。避難した人と避難しなかった人の心の分断。地元では放射線や自分の健康の心配を話題にできない心理。身近に聞く話しからも、住民同士のそして家族同士の分断をひしひしと感じる。

被災者でない私は、分断で起こっている混乱について気を取られる。しかし、何が分断をもたらしたのか。何が分断に手を貸したのか。本質は何なのか。

\*\*\*

避難者の人は、故郷に帰る条件として、自分が住む場所の線量や耕す田畑の線量が気になる。当然である。だから専門家に「一般的に危険が低いことは理解できました。で、私の場合はどうですか？」とたずねる。この質問に専門家が誠実に応えようとするほど、「気になる場所は、測って、判断してください」となる。

けっきょく、納得できるまで一つ一つ測って確認していくしかないのではなからうか。食べ物の調査やホールボディカウンターでの現時点での測定に意味があるかないかについて、科学的観点から意見があることは知っているが、測ることを積み重ねて、みんなが納得していくしかないという気がする。

大事なのは、測ると同時に、その測定の意味や結果について、丁寧に説明することである。それが、たまたま被災しなかった日本の人の責任である。

\*\*\*

ある避難者は、「専門家には、『分かりません』と言ってほしい」「謝ってからものを言っ  
てほしい」としきりに訴えておられた。この意味は、自分たちの状況を分かってほしい、  
同じ目線に立ってほしいという叫びのような気がした。

被災者が経験したことは、生易しいものではない。津波の被害にも遭った避難者は、友人知人を何人も失い、知人が自殺しという体験と同時並行で、放射能の恐怖におびえなが

ら車で子どもと逃げてきたという。そんな経験は、私の想像を絶する。

飯館村のある青年は、このように言っていた。「行政が連れてきた専門家は信用しない。なぜ私たちが今中哲二さんを信用するのか。それは、私たちの生活を知ってくれているからだ。自分たちの側から、ものを考えてくれるからだ」。

ただ、私はプレコンで、「科学者が福島に住み、福島の農産物を食べなければ、人びとは納得しないだろう」と発言したことを反省している。国民が東電の吉田所長を応援したように、何とかしようと汗をかいていることが分かれば信頼するという意味だが、目に見えない汗がたくさんある。またこういう発言は「経験したことでないと語れない」「当事者以外の発言には耳を貸さない」という、大げさに言えば自由な発言や議論を封殺するように思ったからだ。冷静で合理的な思考の上に対話しようと努力すること——これが大事だと思う。

それと、「話が変わる専門家は、信用できない」という意見があるが、私は「話が変わる」こと自体をやり玉に挙げることは慎みたいと思っている。

保身や利己心で話を变えているなら批判されるべきだ。しかし、よく考えたい。誰しも、目の前の人に配慮しながら話をするものである。ましてや、不安や恐怖に陥っている人々を前に、自分の考えを何の配慮もなく同じ調子で話すことができるだろうか。（ところで、まったく別の観点であるが、自分で自分の誤りに気づき、自分で自分を否定していけるのが科学であることを学んだ。同じことを言い続けている人が立派だとは限らない。）

また、今回の事故は、メディアも勉強しながら報道していった。新聞社やテレビ局に、多岐にわたる科学について専門記者を一人ひとり置くことは無理である。しかも原発にまつわる科学技術はさまざまな専門性の複合である。突如の大災害と大事故に、メディアも大混乱だったし、山中ノーベル賞の報道のように追いかけてきた話題とは違う（原発という巨大な複合技術をもっと追いかけるべきだった反省はあるだろう。ただ、一部で追いかけてはいたが世間が関心を示さなかった）。新しいことを知って、前の考えが間違っていたことに気付いたら、経緯をていねいに説明して、前を正直に否定する。それを私たちも冷静に受け止める。でないと、硬直化してしまう。

\*\*\*

科学的真実を追求する営みは、非常に厳しいという。批判に耐えて、地道に研究を積み重ねて、それでもなかなか真実にたどり着けないという。それに耐えられずに、科学から降りる人もいる。他方、被災地で専門性を役立たせる働きをすれば、感謝されるしやりがいがある。そんな活動と同時に専門性を磨き続けることは、時間的にも精神的にも簡単なことではないのかもしれない。

いっぽう、被災地（者）支援といった社会性のある取り組みをすることが、必ずしも科学者として評価されないとも聞く。

これらについて、科学とか科学者の重要な何かがある気がしつつも、これ以上のことがまだ私には言えない。

\*\*\*

さまざまな仕事で社会は成り立っている。

科学者は、世間が放射線の知識を正しく受け取ってくれないことを歯がゆく思っているが、市民は科学が仕事ではない。自分で確かめて判断しなさいと言われても、自分の仕事で精いっぱいだ。たぶん市民は、こう思っている。「私にそれを要求するより先に、間違っただ情報を流した人を糺してください。あるいは、意見の違う専門家同士で決着をつけて、結果を私たちに知らせてください」と。

とは言え、科学者がいくら声を上げて、地味な場所で上がる声に世間は気が付かない。科学と社会のかけ橋というけれど、実際には誰がかけ橋の仕事をするのだろう。科学コミュニケーターなど細かいことはあるが、主役はやはり「伝えることが仕事」のメディアではないのか？ 今後のために、もっとメディアを巻き込んだ検証と議論が必要ではないか。

\*\*\*

実験したり分析したり予測したりという科学的営みには、気持ちや配慮が入ってはいけなはずだ。ただ、科学の成果を使ったり役立てたりするときには、それらは必要だと思う。

災害が起きたとき、私はいつも「たまたま『あなた』だったけれど、それは『私』だったかもしれない」と思う。この感覚は、どこかに持っていたいと思っている。またプレコンのメインテーマではないけれど、被災地（者）支援というとき、こっちが被災地（者）に助けてもらう（頼りとする、力を借りる）という視点も必要だと思っている。

最後に、「今回の事故では多くの人に、今まで考えたことのない知識が突然降りかかってきた。新しい知識はすぐに身につくものではなく時間がかかる。互いに寛容でありたい。また、反復して学習することを怠ってはならない」という佐藤文隆氏の発言があった。この言葉は、忘れるな、そしてあきらめずに、という意味でもあると受け取っている。これだけの困難を無駄にしないためにも、この降りかかった知識を、時間をかけて共有財産にせねばと思う。

了